

ムスリムに対する受容的態度およびイメージに対して情報提示が及ぼす影響
—脅威・類似情報の提示とその認知を中心に—

近藤 文哉¹⁾・金 信遇²⁾・松木 祐馬³⁾・向井 智哉⁴⁾・木村 真利子⁵⁾

¹⁾上智大学グローバル・スタディーズ研究科

²⁾ジェトロ・アジア経済研究所

³⁾早稲田大学文学研究科

⁴⁾東京大学大学院法学政治学研究科

⁵⁾立正大学大学院心理学研究科

要旨：

本研究は、ムスリムに対する受容的態度およびイメージに対して影響を及ぼす変数を探索することを目的とした。先行研究の整理から、ムスリムによって呈される「脅威度」および日本人とムスリムの「類似度」が、受容的態度およびイメージに影響を及ぼす可能性が考えられた。そのため、回答協力者に提示する説明文を操作する「脅威情報提示」と「類似情報提示」、ムスリムに関する認知を尋ねる「脅威度認知」と「類似度認知」という4つの変数を扱い、情報提示は受容的態度およびイメージに影響を及ぼすのか（目的1）、情報提示と認知ではどちらが受容的態度およびイメージとより強い関連を示すのか（目的2）を検討した。その結果、（a）情報提示はイメージに対して部分的な影響を及ぼすが、受容的態度に対してそのような影響は観察されないこと、（b）情報提示よりも認知が受容的態度およびイメージとより強い関連を示すことが示された。これらの結果から、ムスリムに対する受容的態度およびイメージを理解するには、提示される情報自体だけでなく、個人内の心理的プロセスに着目することの重要性が示唆された。

キーワード：

ムスリム、ムスリムに対する受容的態度、ムスリムイメージ、情報提示

1. 本研究の基本的観点

ムスリム¹（イスラーム教徒）が日本において存在感を増すにつれ、日本で生活するムスリムに関するニュースなどのメディアの報道、そして調査・研究は増加しつつある。しかしながら、ムスリムという枠組みから日本の状況について考えた場合、日本の人口の圧倒的多数が非ムスリムであるという事実がある。したがって、日本におけるムスリムを対象とするのであれば、非ムスリムという存在も、ムスリムとの関連の中で言及されるべきであろう。近藤・向井（2017）は、非ムスリム地域におけるムスリムの研究は、ムスリム研究である前に、「ムスリム・非ムスリムの関係性」についての研究であるべきだと主張している。このような視点は、非ムスリムたる大部分の日本人の存在を可視化し、調査・研究を促進するという点で有用であると考えられる。

また、近藤・向井（2017）を含む従来の研究では、非ムスリムが有するムスリムに対する受容的態度およびイメージが主要な考察対象とされている（近藤・向井 2017; 岡井・石川 2011）。これらの受容的態度およびイメージという2変数は、ムスリム・非ムスリムの関係を改善する方途を検討する上で重要な変数であると考えられる。

以上のことから、本研究では、非ムスリムがムスリムに対して持つ受容的態度とイメージを取り上げ、それらに対して影響を及ぼす変数を探索することを目的とする。

以下では、まずムスリムに関する研究分野で行われた国内の先行研究を概観し、それらの研究に残された課題を指摘する。つづいてムスリムに関する研究分野以外の先行研究を援用し、本研究の目的を導出する。その後、それらの目的を質問紙法による準実験によって検証する。

2. 先行研究の概観および研究の目的

2.1 先行研究の課題

近年、日本におけるムスリムの存在感は、モスクにおける国際的な情報の発信などといった肯定的な側面と、テロや過激派などといった否定的な側面双方を含みつつも、大きくなりつつある（店田 2015）。そのような状況を受け、2000年代以降、一般の日本人がムスリムに対して持つイメージや態度を検討した調査がいくつか行なわれている。

例えば、高木（2005）は、国内の9大学の大学生および大学院生を対象に調査を行ない、「テロの宗教」「怖い宗教」などとしてイメージされることを報告している。また、松本（2006）は、東京都と神奈川県23校の高校生を対象とし、「厳格で戒律が多く不自由」「得体が知れず理解しがたい」「不寛容で攻撃的」「ヒゲをはやした砂漠の民」という4つのイメージを抽出している。くわえて、岐阜県岐阜市、福岡県福岡市、富山県射

¹ なお、日本においてムスリムは「外国人」としてイメージされることが多いことから（工藤 2008）、本研究では「外国人」のムスリムを主題として扱う。

水市で一般住民を対象に調査を行なった店田らの研究グループは、岐阜市住民の40.3%がイスラームを攻撃的な宗教とイメージしていること（店田・岡井 2011）、射水市住民の41.4%がムスリムの受け入れに反対であり、84.6%がムスリムとうまくやっていけないと考えていること（店田・石川・岡井 2012）、福岡市住民の62.6%が過激な宗教とイメージしていること（店田・石川・岡井 2013）などを見出している。以上のように、これらの調査は、ムスリムに対するイメージが概してネガティブであること、そしてムスリムに対する受容的態度²が低度に留まることを一貫して示している。

そこで次に問題となるのは、ムスリムに対するイメージや受容的態度と関連する変数は何なのかという点である。この問題を扱った研究としては、岡井・石川（2011）と近藤・向井（2017）がある。岡井・石川（2011）は、岐阜県岐阜市の住民を対象として調査を行ない、ムスリムに対する「受容態度」に「イスラーム認識」「相互理解への積極性」「地域変化イメージ」が及ぼす影響を検討している。分析の結果、相互理解に積極的な回答者ほど、そしてポジティブなイスラーム認識を持つ回答者ほど、ムスリムに対する受容的態度が高いことが見出されている。

近藤・向井（2017）は、因子分析の手法を用いて、ムスリムに対するイメージは「否定的イメージ」「肯定的イメージ」「信心深さイメージ」という3つの因子によって構成されることを示し、先行研究（e.g., 岡井・石川 2011; Tausch, Hewstone, and Roy 2009; Velasco González et al., 2008）をもとに、これらのイメージと他の変数との関連を検討している。その結果、ムスリムに対するイメージは、ムスリムが日本にとって脅威になっているという認知や「アイデンティティの安定性」（下山 1986; Young 1999 青木・伊藤・岸・村澤訳 2007）、「一般的信頼」（Yamagishi and Yamagishi 1994）、「心理的本質主義」（Halsm, Rothschild, and Ernst 2000; Tsukamoto, Enright, and Karasawa 2013; Tsukamoto and Karasawa 2015）といった変数から規定されていることが報告されている。加えて、ムスリムに対するイメージが、ムスリムに対する受容的態度に影響を与えていることが明らかとなった。

以上のように、これら2つの研究は、例えば「相互理解への積極性」や「脅威認知」など、ムスリムに対するイメージおよび受容的態度と関連する変数を明らかにしている。これらは、大部分実態把握に留まっていたそれまでの調査を発展させ、変数間の関連を精緻化したという点で有益ではある。

とはいえ、これらの調査・研究にも課題がある。それは、多文化関係の観点からの課題である。すなわち、これらの調査では、どのような働きかけをすることでイメージや受容的態度が改善するかはまったく検討されていない。多文化関係学が、「文化的背景を異にする人々が互いにとって望ましい関係性を構築するための方途を探索する」学問であり

² 本研究では、近藤・向井（2017）にしたがい「受容的態度」を「一般的な個人的・社会的関係の特徴となる理解と親近性の度合いと程度」と定義する。

(久米 2011, 9)、その探求を「課題解決志向」的(松田 2011, 16)に行っていく学問であるとすれば、どのような人が特定の程度のイメージや受容的態度を持つかを把握するだけでなく、その知見にもとづき、どのような働きかけがイメージや受容的態度の改善につながるかを検討することには大きな価値があると言える。したがって、イメージや受容的態度を改善する方途の探索は不可欠な課題であるといえよう。

2.2 情報提示とその認知(解釈)による影響

この課題に関して、日本におけるムスリム研究では、提示される情報の重要性が指摘されてきた。計量的な分析によって確認されたわけではないが、上述の松本(2006)や高木(2005)は、偏向的な報道によってムスリムのイメージがネガティブなものになっている可能性を示唆している。また加藤(2006)も、日本のムスリムに関する報道はオリエンタリズム的な西欧のメディアの影響を強く受けており、そのような偏向的な報道によって日本人の多くはムスリムに対してネガティブなイメージを持つようになったと指摘している。

提示される情報がムスリムに対する態度やイメージに影響を及ぼすとするこのような指摘は、海外の研究では広く実証的に検討されてきた。そこでは、継続的なものではなく、一回の情報提示でも、ムスリムに対する態度が変化することが指摘されている。例えば、西欧ではイスラームは主として「攻撃的な」宗教とイメージされており(Ahmed and Matthes 2017)、「テロ」や「原理主義」など、必ずしも望ましくないイメージと結びつけられてきたことが論じられてきた(大塚 2001; 末近 2018; 山内 1996)。このような状況を受け、西欧では、テロに関する情報の提示とムスリムに対するイメージや受容的態度の関連が検討されることが多い。例えば von Sikorski et al. (2017)は、「すべてのムスリムが過激である」などの「区別がなされていない(undifferentiated)」ニュース素材と、「すべてのムスリムが過激であるわけではない」などの「区別がなされている

(differentiated)」ニュース素材を参加者に提示した結果、前者への接触がテロへの不安を強め、転じてそのテロ不安がムスリムに対する敵対的な態度を強めることを見出している。また Saleem, Prot, Anderson, and Lemieux (2017)は、ムスリムによるテロに関するニュースを提示された参加者は、ムスリムが災害援助を行ったというニュースを提示された参加者よりも、ムスリムが攻撃的であるというイメージを持ちやすく、そのようなイメージを持つ人ほどムスリムのアメリカ人の市民権の制限に賛成しやすくなることを明らかにしている。

また、同時多発テロに関する調査を行った Dumont et al. (2003)は、テロの被害者と自分(西欧人)が同じカテゴリーに属していると認知させるような情報が提示された場合には、異なるカテゴリーに属していると認知させるような情報が提示された場合と比べて、テロに対する不安が強くなることを報告している。この実験は受容的態度を直接検討した

ものではないが、ムスリムに対する態度にはムスリムと自分の間の類似性に関する認知が関連することを示唆していると考えられる。

以上の研究は、ムスリムに関する類似情報または脅威情報の一回の提示だけでも、非ムスリムのムスリムに対する態度やイメージを変化させることを示唆している。しかし、ムスリム研究以外の分野で行われた調査を見ると、特定の対象に対する態度はそのような情報提示のみではなく、受け取った側がその情報をどのように解釈するかという認知的な側面によっても規定されることが示されている。例えば、犯罪に対する態度を検討した荒井・藤・吉田（2010）は、メディアとの接触と犯罪に対する態度の関連は、直接的なものではなく、視聴内容の印象や衝撃度といった視聴内容から受けるインパクトを媒介した間接的なものであるとするモデルを構築し実証している。また犯罪に対する量刑判断を検討した綿村・分部・高野（2010）は、横領事件を対象としたシナリオでは、犯罪の客観的な重大性（被害額が 7,000 万円／70 万円）よりも主観的な重大性（回答者がその犯罪をどの程度重大だと認知するか）の方が量刑判断をよりよく予測することを報告している³。

2.3 研究の目的

ここまで見てきたように、従来の調査・研究では、一般的な日本人はムスリムに対して概してネガティブなイメージを持ち受容的態度も低度に留まることが明らかにされてきた（高木 2005; 店田・岡井 2011; 店田・石川・岡井 2012, 2013）。そのような結果を受けて行われた研究では、どのような変数が受容的態度およびネガティブなイメージと関連を示すのかが明らかにされたが（近藤・向井 2017; 岡井・石川 2011）、それらの研究には、どのような変数が受容的態度の変化をもたらすかが明らかにされていないという課題が残されていた。

この課題に関して日本のムスリム研究では、メディアなどを通じて提示される情報が、非ムスリムがムスリムに対して持つ態度やイメージに影響を及ぼすとする指摘が広くみられた（e.g., 加藤 2006; 松本 2006; 高木 2005）。しかし、日本の研究は、その影響は実証されておらず、情報が一回または継続（長期）的であるかという区別も行われてこなかった。

これらのことから本研究では、日本においてムスリムに対する受容的態度およびイメージに対して一回の情報提示が及ぼす影響を検討することを第一の目的とする。提示する情報としては、脅威度（Saleem et al. 2017; von Sikorski et al. 2017）と類似度（Dumont et al. 2003）がムスリムに対する態度やイメージと関連することを示唆する欧米の実証的な先行

³ もちろんムスリムと犯罪者は多くの点で異なる。しかし上述のように現在の日本においてムスリムはテロという犯罪と結びつけられることが多いことが指摘されている（高木 2005）。このことを考慮に入れば、犯罪に対する態度に関して得られた知見は、ムスリムに対する態度に関しても一定程度適用可能であると考えられる。

研究をもとに、「ムスリムが日本人にとって脅威になっている／いない」という情報（以下、脅威情報）および「ムスリムと日本人は似た／異なった人々である」という情報（以下、類似情報）を用いる。

それにくわえて、ムスリム研究以外の分野では、提示される情報だけではなく、それをどのように認知するかという側面も重要であることが示されていた（荒井他 2010; 綿村他 2010）。このような認知的な変数は、ムスリムに関する従来の非実証的な研究（e.g., 加藤 2006; 松本 2006; 高木 2005）では取り上げられてこなかった側面である。

そこで、第二の目的として、提示される情報とそれに関する認知のどちらがムスリムに対する受容的態度およびイメージにより大きな影響を与えるかを比較する。具体的な認知に関する変数としては上の情報提示に対応する以下2つの変数を検討する。それらの変数とは、「どの程度ムスリムは脅威になっているか」という認知（以下、脅威度認知）および「どの程度ムスリムは日本人と似ているか」という認知（以下、類似度認知）である。

3. 方法・分析

3.1 方法

東京・京都の4年制私立女子大学2校の受講者187名（平均年齢19.8歳, $SD = 0.92$ ）に調査協力を依頼した。質問紙への回答は任意であること、回答しなくても協力者に不利益が生じることはないことなど倫理に関わる条項を口頭および紙面で伝えた上で、それらに同意した学生のみが質問紙に回答した。調査は授業中に行われた。調査実施時期は2017年12月から2018年1月であった。また今回の調査では、ムスリムに対する脅威情報および類似情報を操作した説明文が用いられたため、後日、質問紙を配布した授業にて、調査の概要と結果、および提示した情報が調査者によって操作されたものであったことを書面で説明した。

質問紙は、回答に関する注意などを記載した表紙と、以下に示す設問によって構成された。回答者は、まず日本におけるムスリムの状況を記述する説明文を読み、その後に各設問に回答するよう求められた。説明文は、全協力者共通の部分と、脅威情報（高／低脅威度）と類似情報（高／低類似度）の2条件で操作された部分から構成された。全協力者共通の説明文は以下の通りであった。「日本には2013年の時点で約11万人のイスラム教徒が住んでいると言われており、その数は年々少しずつ増えています。そのため、新しく住むようになったイスラム教徒の人々と、もともとそこに住んでいた日本人の人々がどのように付き合うべきかについて、考えることが必要になっています」⁴。また情報提示の順序による影響を排除するため、脅威情報に関する文章が先に提示される質問紙と、類似情報に

⁴ なお、質問紙においては、「イスラーム」より一般に膾炙した表記と考えられる「イスラム」を採用した。

関する文章が先に提示される質問紙の2種類を作成した。つまり、回答者は脅威情報と類似情報の高低、提示の順序の組み合わせからなる8種類の質問紙のうちどれか1種類を受け取り回答した。質問紙が複数存在することは回答者に告げられなかった。具体的な設問は以下の通りであった。

脅威情報・類似情報⁵ 高脅威情報条件では、「イスラム教徒が日本に増えることで、いくつか問題が生じています。例えば、イスラム教徒が増えた地域の一部では、ごみ捨てなどのルールが乱れる、治安が悪くなる、日本人の仕事が減る、地域の環境が悪くなるなど、イスラム教徒の増加は、日本人にとって大きな脅威となっています」と教示した。低脅威情報条件では、「イスラム教徒は、日本の社会に問題なく溶けこんでいっています。例えば、イスラム教徒はモスク（イスラム教の礼拝所）を開放し、自分たちの文化や伝統を、近隣に住む人々に発信しており、それによって日本人の側からは『外国人との交流の機会が増えている』『国際理解が深まった』などと、広く歓迎されています」と教示した。高類似情報条件では、「イスラム教徒と日本人はとてもよく似た人々です。というのも、日本人にせよイスラム教徒の人々にせよ、どちらの人々も西欧的な価値観に完全には染まりきってはおらず、古くから持ちつづけてきた伝統的な文化や価値観をいまでも大事にしつづけているからです。このような点で、イスラム教徒の人々と日本人は非常によく似ています」と教示した。低類似情報条件では、「イスラム教徒と日本人はまったく異なる人々です。というのも、現在では日本人は、宗教や文化、伝統の影響を直接的にはあまり受けなくなり、ますます現代的な価値観に染まっていっている一方で、イスラム教徒はいまでも伝統的な価値観や宗教、文化などを非常に重視しているからです。このような点で、イスラム教徒の人々と日本人は非常に異なります」と教示した。

ムスリムに対する受容的態度尺度 小原・山崎（1991）の社会的距離尺度を、ムスリムを対象とするよう改変した近藤・向井（2017）のムスリムに対する受容的態度尺度を用いた。「自分もしくは家族の親友となること」「日本に住むこと」「自分の家の隣に住むこと」「帰化して日本国籍となること」「自分の兄弟姉妹と結婚すること」の5項目に、「受け入れない」（1）から「受け入れる」（5）の5件法での回答を求めた。

ムスリムに対するイメージ尺度 同様に近藤・向井（2017）によって作成されたムスリムに対するイメージ尺度を用いた。この尺度は、ムスリムに対するイメージを「否定的イメージ」10項目（例：「過激」「こわい」「攻撃的」）、「肯定的イメージ」8項目（例：「自由」「寛大」「穏やか」）、「信心深さイメージ」8項目（例：「忠実」「信心深い」「教えを厳格に守る」）の3因子26項目で測定するものである。それぞれの項

⁵ 情報提示の説明文は Appendix A に、使用変数の一覧と質問項目は Appendix B に記載した。

目に、「まったく当てはまらない」(1)から「とても当てはまる」(5)の5件法での回答を求めた。

脅威度認知 「イスラム教徒は日本人にとって、どの程度脅威になっていると思いますか」と尋ね、「全く脅威になっていない」(1)から「非常に脅威になっている」(5)の5件法での回答を求めた。

類似度認知 「イスラム教徒と日本人は、どの程度似ている人々だと思いますか」と尋ね、「全く似ていない」(1)から「非常に似ている」(5)の5件法での回答を求めた。

3.2 分析結果

まず、各変数の平均値、標準偏差、Cronbachの α 係数を算出した。各変数の α 係数は.74以上で十分な内的一貫性を示した。つづいて各変数間のPearsonの積率相関を算出した。受容的態度は、類似度認知の変数すべてと有意な相関を示した。上記の結果をTable 1に示す。

Table 1
各変数の記述統計量および相関係数

		M	(SD)	α	1	2	3	4	5	6	7
1	受容的態度	3.05	(0.93)	.91							
2	否定的イメージ	3.58	(0.72)	.90	-.60 **						
3	肯定的イメージ	2.46	(0.54)	.74	.54 **	-.56 **					
4	信心深さイメージ	3.73	(0.60)	.79	.33 **	-.06	.14				
5	脅威情報	—	—	—	-.12	.04	-.18 *	-.19 **			
6	類似情報	—	—	—	.01	.06	.18 *	-.01	-.13		
7	脅威度認知	3.01	(0.90)	—	-.46 **	.48 **	-.36 **	-.15 *	.18 *	-.01	
8	類似度認知	2.44	(0.77)	—	.12	-.11	.19 **	.04	-.18 *	.31 **	-.07

** $p < .01$, * $p < .05$

また脅威情報と類似情報からなる組み合わせごとの各変数の値を算出した (Table 2)。

Table 2
各条件における記述統計

	受容的態度		否定的イメージ		肯定的イメージ		信心深さイメージ		脅威度認知		類似度認知	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
高脅威情報・高類似情報 (n = 40)	2.84	(0.82)	3.73	(0.70)	2.46	(0.47)	3.59	(0.52)	3.23	(0.80)	2.48	(0.68)
低脅威情報・高類似情報 (n = 61)	3.19	(0.94)	3.55	(0.71)	2.62	(0.56)	3.81	(0.58)	2.85	(0.89)	2.80	(0.76)
高脅威情報・低類似情報 (n = 45)	3.00	(1.01)	3.50	(0.84)	2.27	(0.57)	3.62	(0.66)	3.16	(0.98)	2.13	(0.76)
低脅威情報・低類似情報 (n = 41)	3.09	(0.91)	3.57	(0.63)	2.45	(0.51)	3.86	(0.61)	2.88	(0.87)	2.24	(0.70)

脅威情報を先に提示された群と類似情報を先に提示された群間で各変数に差がみられるかを Welch の t 検定によって検討したところ、群間に有意な差が見られた変数はなかったため (受容的態度 $t(180.69) = 0.26, p = .80, d = .04$; 否定的イメージ $t(182.00) = 0.47, p = .64, d = .07$; 肯定的イメージ $t(182.00) = 0.53, p = .60, d = .08$; 信心深さイメージ $t(180.06) = 1.32, p = .19, d = .19$; 類似度認知 $t(175.78) = 0.99, p = .32, d = .15$; 脅威度認知 $t(174.65) = 0.17, p = .87, d = .02$)、正順と逆順を区別せず合算した。

つづいて、受容的態度、否定的イメージ、肯定的イメージ、信心深さイメージを従属変数、脅威情報、類似情報、脅威度認知、類似度認知を独立変数とする階層的重回帰分析を行った (Table 3)。

Table 3
ムスリムに対する受容的態度およびイメージを従属変数とする階層的重回帰分析

	受容的態度			否定的イメージ		肯定的イメージ		信心深さイメージ	
	step 1	step 2	step 3	step 1	step 2	step 1	step 2	step 1	step 2
脅威情報 (高 = 1)	-.13	-.03	.01	.04	-.06	-.16 *	-.09	-.19 *	-.17 *
類似情報 (高 = 1)	.00	-.04	-.02	.06	.09	.17 *	.13	-.03	-.03
脅威度認知		-.45 **	-.17 **		.48 **		-.33 **		-.11
類似度認知		.10	.03		-.12		.11		.01
否定的イメージ			-.38 **						
肯定的イメージ			.23 **						
信心深さイメージ			.26 **						
R^2	.02	.22	.52	.00	.24	.06	.18	.04	.05
ΔR^2		.21 **	.29 **		.24 **		.12 **		.01

表内の数値は標準化偏回帰係数を示す

** $p < .01$, * $p < .05$

なお、近藤・向井 (2017) では受容的態度とイメージが関連するという知見が得られているため、受容的態度を従属変数としたモデルでは、イメージと受容的態度の関連を検討するべく、脅威・類似情報、脅威度認知・類似度認知にくわえ、否定的イメージ、肯定的イメージ、信心深さイメージも独立変数としたモデルの推定も行なった。

ステップ 1 では情報提示のみの効果を見るために、脅威情報および類似情報のみを投入した。なお、脅威情報および類似情報にはダミー変数を使用し、それぞれ高い条件を 1、低い条件を 0 として投入した。その結果、脅威情報は肯定的イメージ ($\beta = -.16, p = .03$) および信心深さイメージ ($\beta = -.23, p = .01$) と負の関連を示し、類似情報は肯定的イメージと正の関連 ($\beta = .17, p = .02$) を示した。つまり、脅威度が高い文章を読んだ回答者は、肯定的イメージと信心深さイメージを持ちづらく、類似度が高い文章を読んだ回答者はポジティブなイメージを持ちやすいことが示された。

つづくステップ 2 では、脅威度認知および類似度認知を統制した上での情報提示の効果および脅威度認知および類似度認知自体の効果を検討するため、脅威度認知、類似度認知、脅威情報、類似情報の 4 つの変数を投入して分析を行った。従属変数はステップ 1 と同様に、受容的態度、否定的イメージ、肯定的イメージ、信心深さイメージであった。その結果、ステップ 1 で見られた脅威情報と肯定的イメージ ($\beta = -.09, p = .22$) および類似情報と肯定的イメージ ($\beta = .13, p = .06$) の関連は有意ではなくなった。一方、脅威情報と信心深さイメージの関連はこのステップでも有意なままであった ($\beta = -.17, p = .03$)。また脅威度認知は、受容的態度 ($\beta = -.45, p < .01$) および肯定的イメージ ($\beta = -.33, p < .01$) と負の関連を示し、否定的イメージ ($\beta = .48, p < .01$) とは正の関連を示した。つまり、脅威情報および類似情報と肯定的イメージの関連は、脅威度認知と肯定的イメージの関連ほど強くないこと、ムスリムが日本人にとって脅威になっていると考える人ほど受容的態度と肯定的イメージが低く、否定的イメージが高いことが示された。

受容的態度を従属変数とするモデル（ステップ3）では、受容的態度と脅威度認知（ $\beta = -0.17, p = .01$ ）、否定的イメージ（ $\beta = -0.38, p < .01$ ）、肯定的イメージ（ $\beta = .23, p < .01$ ）、信心深さイメージ（ $\beta = .26, p < .01$ ）のあいだに有意な関連が見られた。つまり、脅威度認知が低いほど、肯定的イメージと信心深さイメージを持つほど、そして否定的イメージを持っていないほど、受容的態度が高いことが示された。

なお、上述したすべてのモデルの VIF は 1.77 以下であったため、得られた結果は多重共線性によるものではないと判断した。またすべてのモデルについて学年と年齢を統制した上で再度分析も行ったが、結果に大きな相違は見られなかった。

4. 考察

4.1 本研究の示唆

本研究では、質問紙を用いた準実験の手法を用いて、情報提示の内容はムスリムに対する受容的態度にどのような影響を与えるのか（目的1）、脅威情報・類似情報と脅威度認知・類似度認知のうち、どちらが受容的態度およびイメージと強い関連を示すのか（目的2）を明らかにすることを目指した。その結果、これら2つの目的に関して以下のことが明らかになった。

まず目的1について述べる。階層的重回帰分析を用いたステップ1から、脅威情報は肯定的イメージおよび信心深さイメージに負の影響を与え、類似情報は肯定的イメージには正の影響を与えることが示された。つまり、高脅威情報が提示された場合、肯定的イメージおよび信心深さイメージを持ちにくくなり、高類似情報が提示された場合、肯定的イメージを持ちやすくなることが示された。しかし有意な関連がみられた従属変数に対する脅威情報・類似情報の説明力は乏しかった（肯定的イメージ $R^2 = .06$; 信心深さイメージ $R^2 = .04$ ）⁶。また、脅威情報および類似情報は、受容的態度および否定的イメージとは有意な関連を示さず、説明力は肯定的イメージと信心深さイメージにもまして乏しかった（ R^2 s = .02, .00）。

以上のことから、目的1に関しては以下のことが示された。すなわち情報の提示は肯定的イメージおよび信心深さイメージに影響を与えており、提示される情報の種類について言えば、類似情報よりも脅威情報の方が、従属変数と強い関連を示した。しかし以上の関連が見出だされたとはいえ、情報提示と受容的態度およびイメージの関連は概して小さなものであった。

それでは、どのような変数が受容的態度およびイメージと関連するのだろうか。それを明らかにすることを試みたのが脅威度認知および類似度認知を検討した目的2である。

⁶ これは脅威情報および類似情報によっては受容的態度の散らばりの約6%、否定的イメージの約4%しか説明できないことを意味している。

この目的に際しては、脅威度認知および類似度認知を投入した上で階層的重回帰分析を行った。その結果、脅威度認知は受容的態度および肯定的イメージと負の関連を示し、否定的イメージとは正の関連を示した。またステップ1で有意であった脅威情報および類似情報と肯定的イメージの関連は、脅威度認知および類似度認知を投入したステップ2では有意ではなくなった。このことは、脅威情報・類似情報と受容的態度およびイメージの関連は、脅威度認知および類似度認知によって説明されることを意味する。一方、信心深さイメージでは、脅威度認知および類似度認知は有意ではなく、脅威情報がステップ2でも変わらず有意であった。

以上のことから、目的2に関しては、受容的態度、否定的イメージ、肯定的イメージに関しては、提示された情報（特にムスリムが脅威になっているという情報）をどのように解釈するかという認知的な側面が、提示された情報自体よりも重要であることが示された。

とはいえ一方で、信心深さイメージについては、その逆の関係が見出された。つまり、信心深さイメージでは、情報提示の影響は情報認知の影響よりも大きかった。このことから、信心深さイメージは他の2つのイメージと比べて、提示される情報の影響を受けやすく、個人があらかじめ有する態度や信念に依存する余地の少ない不安定な性質を持つことが推測できる。イメージの持つこのような性質の違いが、結果の差を生んだのだと考えられる。

また、受容的態度に関するモデルでは、ステップ1および2で投入した変数にくわえ、ステップ3として、否定的イメージ、肯定的イメージ、信心深さイメージを投入した。その結果、否定的イメージは受容的態度を弱める一方、肯定的イメージおよび信心深さイメージは受容的態度を強めることが見出された。否定的イメージおよび肯定的イメージに関する結果は、先行研究（近藤・向井 2017）と一致しており、受容的態度と否定的イメージのあいだには負の関連が見られ、肯定的イメージとのあいだには正の関連が見られるという知見は頑健なものであることが示唆された。

その一方で、信心深さイメージに関しては、無関連が見られた先行研究とは異なり、正の関連が見られた。この結果は、ムスリムを信心深い人々とイメージするほど、その人々に対して受容的であるということを示している。先行研究と本研究で異なる結果が得られた理由としては、サンプルの属性の差などが考えられる。つまり、先行研究では男女の大学生が対象とされていたのに対し、本研究では女性の学生のみが対象とされていた。今後はより代表性の高いサンプルを用いて、信心深さイメージと受容的態度の関連を検討することが求められる。

4.2 本研究の意義①：一回の情報提示の影響

本研究で得られた知見の意義は以下の2点である。第一に、肯定的イメージおよび信心深さイメージは一回の情報提示によって影響されることを示したことである。具体的には、階層的重回帰分析では、肯定的イメージと信心深さイメージは脅威情報と負の関連を示し、肯定的イメージは類似情報とも正の関連を示した。また、信心深さイメージと脅威情報の関連は、情報認知の影響を統制した上でも有意であった。

本研究の基本的観点の箇所で述べたとおり、従来 of ムスリム研究では、ムスリム自身のコミュニティ (e.g., 桜井 2003) やその表象 (e.g., 福田 2007) を対象としたものが大部分であり、それらに接する人々の側の変数の検討は相対的に手薄であった。また、日本のムスリム研究では、メディアによって提示される情報が、非ムスリムがムスリムに対して持つ受容的態度やイメージに影響を及ぼしていることが示唆されてきた (e.g., 加藤 2006; 松本 2006; 高木 2005)。このような指摘は、海外の研究では支持されていたが、日本においては実証的な検討は行われておらず、また、情報が一回あるいは継続的であるかという区分を意識的に行っているものはなかった。以上のように、日本において広く言及されながらも実証されていなかった知見を実証データによって明らかにしたことが本研究の第一の意義である。

以上の知見からは以下2つの具体的な提案を行うことができる。第一に、一回の情報提示はイメージに対して影響を及ぼすことが示された。ここから、様々なイメージ改善の手法を提案可能である。例えば、大学の限られた回数と時間の講義であっても、類似情報および脅威情報を提示することで学生のムスリムに対するイメージをより良くすることが可能だと考えられる。また、ムスリムが日本人に対して脅威になっているという言説や、日本人とムスリムのあいだにある相違を過度に強調する言説に対しては、継続的な批判はもちろんのこととしても、まずは早急に簡潔な批判を試みるのが有効であるとも指摘できる。

第二に、情報認知を統制した上でも、脅威情報は信心深さイメージに影響を及ぼしていたこと、ならびに信心深さイメージは受容的態度を強めていたことから、情報提示を通じて受容的態度の改善を試みる場合には、信心深さイメージに重点を置いた働きかけを行うことが特に重要であると考えられる。例えば、受容的態度の改善を行いたい場合、ムスリムの世俗的な面を発信するよりも、むしろ、信仰に篤い側面を発信する方がより良い結果を生むことになるだろう。

4.3 本研究の意義②：情報認知の影響

上のような知見が見出された一方で、ムスリム研究に限定されないより広い分野の知見を検討すると、人々が特定の情報に接触した際、その情報をどのように認知するかには大きな個人差があることを示唆する研究が複数存在した (荒井他 2010; 綿村他 2010)。それらの示唆を踏まえ、本研究では、脅威情報および類似情報だけではなく、脅威度認知お

および類似度認知を含めて検討を行った。その結果、受容的態度、肯定的イメージ、否定的イメージは、提示される情報の性質よりもそれに関する認知によってより強く規定されることが示された。

中東研究やイスラーム研究など、ムスリムと関連した日本の諸研究では、上述のように、情報提示の重要性は強調されていたが、その情報をどのように解釈するかという認知的な側面はまったく注目されてこなかった (e.g., 加藤 2006; 松本 2006; 高木 2005)。つまり、従来の研究では、例えばムスリムについてのネガティブな情報が提示されれば、それを見聞きした個人は直接的にムスリムに対してネガティブなイメージを持つようになることが想定されていた。しかし本研究の結果を考えれば、このような想定は正しくない。個人は受け取った情報をそのまま受け入れるのではなく、より複雑な認知的処理を行った上でその情報を取り入れている。したがって、今後の研究では、提示される情報（例えばメディア報道）のみに着目するのではなく、情報提示を受けた後に受容的態度やイメージ、さらには脅威度・類似度認知を形作る個人内の心理的なプロセスの解明を試みるのが、非ムスリムとムスリムの関係性を改善させる具体的方策を提案するために必要であろう。以上のように、情報提示自体の重要性だけではなく、情報認知の重要性を明らかにしたことが本研究の第二の意義である。

4.4 今後の課題

本研究は、非ムスリムとムスリムがより良い関係を築くための方略を考える上で、有益な知見を提供し得るものであると考えられる。しかしながら、本研究にはいくつかの限界が存在する。まず、本研究では、一回の情報提示のみを検討した。一回限りの情報提示は、情報提示の効果の最も基礎的な単位であり、その意味において、情報の提示が長期的に行われた際に与える効果について考える際にも一定の示唆を与えるものであると考えられる。しかしながら、今後はメディアによって比較的長期に渡って繰り返し提示される情報が、非ムスリムの態度やイメージにどのような影響を与えるのかについて、実証的な検討を行うことが有用であろう。

関連して第二に、本研究では情報認知が受容的態度とイメージにとって重要であることを明らかにしたが、この情報認知がどのような変数によって規定されるのかは本研究では明らかにされていない。今後は、政治的態度やパーソナリティ変数などとの関連についての知見を蓄積していく必要があるだろう。

第三に、本調査で操作した情報提示の内容は、脅威度と類似度のみであったことである。したがって、脅威度および類似度以外の情報が操作されることによって受容的態度やイメージが大きく変化する可能性は残されている。またそれらの操作のために用いた説明文にしても、その説明文が有する特殊な性質によって今回の知見が得られた可能性は残されている。例えば、脅威情報に関する説明文中に「モスク」の語が含まれたことによ

て、脅威情報が信心深さイメージに影響を及ぼした可能性を排除することは現段階では困難である。これらはシナリオ法を用いた研究の限界であり、本研究の知見の頑健性は今後の調査によって検討する必要がある。

第四に、本研究は受容的態度やイメージに対して情報提示が影響を及ぼすことを明らかにしたとはいえ、調査の対象として女子大学生のみを用いた。したがって、本研究で得られた知見の一般化可能性は今後の研究によって検証される必要がある。

以上のように、計量的な手法に基づき行われた本研究が示した問題関心、結果、そして課題は、心理学やムスリム研究だけではなく、中東研究やイスラーム研究などの諸分野の議論とも密接に関連している。ムスリム・非ムスリムの間の「より善き」関係性のため、そして適切な課題解決のためには、今後より一層、それら諸分野との協業が必要になると考えられよう。

参考文献

- Ahmed, S., and Matthes, J. 2017. Media representation of Muslims and Islam from 2000 to 2015: A meta-analysis. *International Communication Gazette* 79: 219-244.
- 荒井崇史・藤圭・吉田富士雄. 2010. 「犯罪情報が幼児を持つ母親の犯罪不安に及ぼす影響」 『心理学研究』 81: 397-405.
- Dumont, M., Yzerbyt, V., Wigboldus, D., and Gordijn, E. H. 2003. Social categorization and fear reactions to the September 11th Terrorist Attacks. *Personality and Social Psychology Bulletin* 29: 1509-1520.
- 福田充. 2007. 「イスラムはどう語られたか? 国際テロ報道におけるイスラム解説の談話分析」 『メディア・コミュニケーション』 57: 49-65.
- Haslam, N., Rothschild, L., and Ernst, D. 2000. Essentialist beliefs about social categories. *British Journal of Social Psychology* 39: 113-127.
- 板垣雄三. 2003. 『イスラーム誤認』 岩波書店.
- 加藤博. 2006. 『「イスラム vs. 西欧」の近代』 講談社現代新書.
- 近藤文哉・向井智哉. 2017. 「計量的手法を用いたムスリムに対する受容的態度の規定要因の検討——『非ムスリム研究』の展開に向けて——」 『日本中東学会年報』 33(1): 95-117.
- 工藤正子. 2008. 『越境の人類学——在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち——』 東京大学出版会.
- 小原裕子・山崎嘉比古. 1991. 「外国人に対する受容度及びその関連要因——日本人女子大学生の調査から——」 『年報社会学論集』 4: 105-116.
- 久米昭元. 2011. 「多文化社会としての日本」 多文化関係学会 (編) 『多文化社会日本の課題——多文化関係学からのアプローチ——』 明石書店: 9-16.
- 松田陽子. 2011. 「多文化関係学へのアプローチ」 多文化関係学会 (編) 『多文化社会日本の課題——多文化関係学からのアプローチ——』 明石書店: 16-24.
- 松本高明. 2006. 「日本の高校生が抱くイスラーム像とその是正に向けた取り組み——東京・神奈川の高校でのアンケート調査を糸口として——」 『日本中東学会年報』 21(2): 193-214.
- 岡井宏文・石川基樹. 2011. 「地域住民におけるムスリム・イスラームに対する意識・態度の規定要因——岐阜市調査の事例より——」 『イスラーム地域研究ジャーナル』 3: 36-46.
- 大塚和夫. 2001. 『イスラーム主義とは何か』 岩波書店.
- 桜井啓子. 2003. 『日本のムスリム社会』 ちくま新書.
- Saleem, M., Prot, S., Anderson, C. A., and Lemieux, A. F. 2017. Exposure to Muslims in media and support for public policies harming Muslims. *Communication Research* 44(6): 841-869.

- 下山晴彦. 1986. 「大学生の職業未決定の研究」 『教育心理学研究』 34(1): 20-30.
- 末近浩太. 2018. 「イスラーム主義——もう一つの近代を構想する——」 岩波書店.
- von Sikorski, C., Schmuck, D., Matthes, J., and Binder, A. 2017. “Muslims are not terrorists”:
Islamic State coverage, journalistic differentiation between terrorism and Islam, fear reactions,
and attitudes toward Muslims. *Mass Communication and Society* 20(6): 825-848.
- 高木規矩郎. 2005. 「日本人大学生のイスラム意識調査について」 『イスラム科学研究』
1: 199-209
- 店田廣文. 2015. 「イスラーム教徒人口の推計——2013年——」 Retrieved from
<http://imemgs.com/document/20150714mij.pdf> (2018年5月27日)
- 店田廣文・岡井宏文. 2011. 「外国人に対する意識調査・岐阜市報告書」 Retrieved from
<http://imemgs.com/document/gifusurvey.pdf> (2018年5月27日)
- 店田廣文・石川基樹・岡井宏文. 2012. 「外国人に関する意識調査・射水市報告書」
Retrieved from <http://imemgs.com/document/2012gaikokujinishikichousa.pdf> (2018年5月27日)
- 店田廣文・石川基樹・岡井宏文. 2013. 「外国人住民との共生に関する意識調査・福岡市報告書」 Retrieved from <http://imemgs.com/document/2013gaikokujinishikichousa.pdf> (2018年5月27日)
- Tausch, N., Hewstone, M., and Roy, R. 2009. The relationships between contact, status and prejudice: An integrated threat theory analysis of Hindu-Muslim relations in India. *Journal of Community and Applied Social Psychology* 19(2): 83-94.
- Tsukamoto, S., Enright, J., and Karasawa, M. 2013. Psychological essentialism and nationalism as determinants of interethnic bias. *Journal of Social Psychology* 153(5): 515-519.
- Tsukamoto, S., and Karasawa, M. 2015. From interpersonal to inter-ethnic differentiation: The role of psychological essentialism. *Journal of Human Environmental Studies* 13(1): 13-20.
- Velasco González, K., Verkuyten, M., Weesie, J., and Poppe, E. 2008. Prejudice towards Muslims in the Netherlands: Testing integrated threat theory. *British Journal of Social Psychology* 47: 667-685.
- 綿村英一郎・分部利紘・高野陽太郎. 2010. 「一般市民の量刑判断——応報のため? それとも再犯抑止やみせしめのため?——」 『法と心理』 9(1): 98-108.
- Yamagishi, T., and Yamagishi, M. 1994. Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion* 18(2): 129-166.
- 山内昌之 (編). 1996. 『「イスラーム原理主義」とは何か』 岩波書店.
- Young, J. 1999. *The exclusive society: Social exclusion, crime and difference in late modernity*. London: Sage. (ヤング, Y., 青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂 (訳). 2007. 『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異——』 洛北出版).

付録

Appendix A 情報提示の説明文

提示情報	条件	説明文
脅威情報	高脅威	イスラム教徒が日本に増えることで、いくつか問題が生じています。たとえば、イスラム教徒が増えた地域の一部では、ごみ捨てなどのルールが乱れる、治安が悪くなる、日本人の仕事が減る、地域の環境が悪くなるなど、イスラム教徒の増加は、日本人にとって 大きな脅威 となっています。
	低脅威	イスラム教徒は、日本の社会に問題なく溶けこんでいっています。たとえば、イスラム教徒はモスク（イスラム教の礼拝所）を開放し、自分たちの文化や伝統を、近隣に住む人々に発信しており、それによって日本人の側からは「外国人との交流の機会が増えている」「国際理解が深まった」などと、 広く歓迎 されています。
類似情報	高類似	イスラム教徒と日本人は とてもよく似た 人々です。というのも、日本人にせよイスラム教徒の人々にせよ、どちらの人々も西欧的な価値観に完全には染まりきってはおらず、古くから持ちつづけてきた伝統的な文化や価値観をいまでも大事にしつづけているからです。このような点で、イスラム教徒の人々と日本人は非常によく似ています。
	低類似	イスラム教徒と日本人は まったく異なる 人々です。というのも、現在では日本人は、宗教や文化、伝統の影響を直接的にはあまり受けなくなり、ますます現代的な価値観に染まっていく一方で、イスラム教徒はいまでも伝統的な価値観や宗教、文化などを非常に重視しているからです。このような点で、イスラム教徒の人々と日本人は非常に異なります。

注) 強調は実際の質問紙と同様。

Appendix B 使用変数の一覧と質問項目

変数名	因子	質問項目
ムスリムに対する 受容的態度	—	自分もしくは家族の親友となること
		日本に住むこと
		自分の家の隣に住むこと
		帰化して日本国籍となること
		自分の兄弟姉妹と結婚すること
ムスリムに対する イメージ	否定的イメージ	過激、危険、こわい、復讐心が強い、攻撃的、近寄りたくない、 得体が知れない、奇妙な習慣を持つ、排他的、なじみがない
	肯定的イメージ	自由、カッコイイ、寛大、先進的、理解しやすい、穏やか、素朴、平和
	信心深さイメージ	忠実、信心深い、まじめ、教えを厳格に守る、厳しい、結束力が強い、 礼儀正しい、伝統的
脅威度認知	—	イスラム教徒は日本人にとって、どの程度脅威になっていると思いますか
類似度認知	—	イスラム教徒と日本人は、どの程度似ている人々だと思いますか

**The effects of information presentation on tolerant attitude toward and images of Muslims:
Focusing on threats and similarities**

Fumiya Kondo¹⁾, Kim Shinwoo²⁾, Yuma Matsuki³⁾, Tomoya Mukai⁴⁾, and Mariko Kimura⁵⁾

¹⁾ Sophia University, ²⁾ IDE-JETRO, ³⁾ Waseda University, ⁴⁾ The University of Tokyo, ⁵⁾ Rissyo
University

Abstract :

This paper aimed to explore factors that affect tolerant attitude toward and images of Muslims.

Drawing on existing studies that emphasized the predictive role of perceived threats posed by

Muslims and perceived similarities between Muslims and Japanese, (a) an information presentation

that either emphasized or did not emphasize threats and similarities, and (b) respondents' perceived

threats and similarities were tested for their effectiveness in predicting tolerant attitude toward and

images of Muslims. The results of the analysis showed that (a) information presentation partially

affected images, but not tolerant attitude, and that (b) perceived threats and similarities were better

predictors of tolerant attitude and images than information presentation. The practical implications

were further discussed.

Keywords :

Muslims, Tolerant attitude toward Muslims, Muslim images, Information presentation